

Traditional Tales Stage 7 'Aladdin'

p. 2

冬になるとツバメがやってくる——そんな遠い国でのお話です。

あるところに貧しい未亡人とアラジンという息子が住んでいました。

親子は働き者でしたが、財産はほとんどなにもありませんでした。でもアラジンは、「いつか金やルビーやダイヤモンドを手に入れるんだ」という大きな夢を持っていました。

p. 3

ある日、見知らぬ男がアラジンの家にやってきました。男はアラジンのおじさんだと名乗りました。「私のランプを探すのを手伝ってくれば、君はお金持ちになれるよ」男は目をギラリと光らせて言いました。

「お金持ち？」アラジンの目が宝石のように輝きました。

p. 4

男はアラジンを砂漠に連れて行きました。何日も何日もラクダにのりました。

やっと着いたところには、岩かげに作られた隠し扉がありました。扉の向こうには洞くつが続いています。男はアラジンの中に入らせました。

洞くつの中は真っ暗だったので、アラジンはこわごわ進んで行きました。そしてついにランプを見つけたのです。

p. 5

「おじさん、外に出るから手をかして」アラジンはそう言いましたが、男は、

「ランプが先だ」と言います。

でも真っ暗な洞くつの中でおびえていたアラジンは、

「おじさん、お願い。ぼくを外に出して！」と泣いて頼みました。

p. 6

ランプを渡さないアラジンに腹を立てた男は、魔法の粉を使って隠し扉の入り口を閉じてしまいました。

アラジンは暗く冷たい洞くつの中にひとり残されました。悲しくなったアラジンは、ランプを見つめながら大粒の涙を流しました。涙はキラキラと輝きながら、ランプの上にぽとりぽとりと落ちました。

p. 7

アラジンがその涙をぬぐおうとランプをこすった時です。ランプの中から突然魔神まじんがあらわれました。魔神は言いました。

「ご主人様、あなたの願いごとを3つかなえて差しあげます。1つ目の願いごとは何ですか？」

アラジンはびっくりして言いました。

「ぼく……うちに帰りたいんだ」

p. 8

あっと思う間もなく、気がつけばアラジンは自分の家の台所にいました。アラジンは早速お母さんに、いじわるなおじさんや隠し扉や洞くつの話をしました。

その話を聞いたお母さんは驚いて言いました。

「その人はおじさんなんかじゃないわ。悪い魔法使いよ！」

p. 9

アラジンはお母さんの前でランプをこすって見せました。すると魔神があらわれてこう言いました。

「ご主人様、2つ目の願いごとは何ですか？」

アラジンは答えました。

「ぼくはお金持ちになりたい」

p. 10

またたく間に、目の前に宝の箱があらわれました。お母さんとアラジンは、そのお金で新しい家を買いました。ふたりは宮殿の近くのその家で、何年も幸せに過ごしました。そして、あの悪い魔法使いのことなどすっかり忘れてしまいました。

p. 11

宮殿にはジャスミンというお姫様が住んでいました。ジャスミンは心が優しく、頭がよいばかりでなく、とても美しいお姫様でした。その美しさはまるで、砂漠にのぼる朝日のようでした。その頃、アラジンもりっぱな若者に成長していました。たくましくて、がまん強くて、その上お母さん思いの優しい若者でした。

p. 12

アラジンはいつも遠くからジャスミンのことを見つめていました。そんなある日、ふたりは宮殿の庭で出会い、そしてお互いのことを好きになりました。ふたりはいろいろな話をして過ごしました。地球はどんなふうにあるのか、ラクダはどうして立ったまま眠るのか……。

p. 13

こうしてふたりは結婚しました。王国じゅうの人々がやってきて祝福しましたが、その中にひとりだけ喜んでいない人がいました。それはあの悪い魔法使いでした。魔法使いはジャスミンを自分のものにしたいと思っていたのです。

p. 14

魔法使いは、またアラジンに怒りを覚えました。「これもすべてあいつが私のランプを盗んだせいだ。何が何でも取り戻さねば」

p. 15

魔法使いは長いことかかって、ようやくある悪だくみを思いつきました。まずはランプをたくさん買いこんで、ランプ売りに変装しました。

p. 16

アラジンがおかあさんと一緒に旅に出ているときをみはからって、魔法使いは宮殿の前を行ったり来たりしながら大きな声で呼びかけました。「ランプの交換はいかがですか。古いランプと新しいランプを交換しますよ！」

p. 17

ジャスミンは魔法のランプのことは何も知りませんでした。だからランプ売りの声を聞いた時も、ただこう思っただけでした。「この古ぼけたランプをきれいなランプと交換したら、きっとアラジンは喜ぶわ」

p. 18

ランプを手にした魔法使いは、早速魔神を呼び出しました。「ご主人様、願いごとは何ですか？」魔神が言うと、魔法使いはにやりと笑って言いました。

「私とジャスミンをどこか遠くへ連れて行け。アラジンが絶対に見つけられないところだ」

p. 20

魔神は命じられたとおりに、ふたりをはるか遠い国に連れて行きました。アラジンがうちに帰ってみると、ジャスミンがいなくなっていました。ランプもありません。アラジンはすぐにそれが悪い魔法使いのしわざだとわかりました。アラジンは、何があっても、大切なジャスミンを見つけるまで探し続けると心に誓いました。

p. 22

アラジンはまず町じゅうを探してまわりましたが、ジャスミンを見つけることはできませんでした。次は王国じゅうをまわりましたが、やはり見つけることはできませんでした。

p. 23

でもアラジンはあきらめませんでした。今度は別の王国へ行ってみることにしました。太陽がキラキラと照りつけます。長い長い昼のあとには、ランプの油よりも真っ暗な夜が待っていました。

p. 24

アラジンは、山でも谷でも、どんな遠いところでもたずねて行きました。こうして1年と1日がたちましたが、まだジャスミンは見つかりません。

p. 25

ある朝早く、アラジンは1軒の家を見つけました。のどが渴いていたので、水を1杯もらおうとその家の扉をたたきました。すると、中から出てきたのは、なんとジャスミンだったのです。アラジンは涙を流して喜びました。

p. 26

ちょうどそのとき魔法使いは眠っていました。そこでジャスミンはこれまでにあったことや、魔法使いがこの魔法のランプをずっと前から探していたことなどを説明しました。

p. 27

ジャスミンはまた、魔法使いが持っている魔法の粉についても説明しました。

「この粉にはいろいろな種類があって、どんな扉も2度と開かないようする粉もあるし、ネズミをトラに変える粉もあるし、人間を巨人に変えたり、その反対に小さくして消してしまう粉もあるのよ」

とジャスミンは言いました。

p. 28

魔法使いはまだ眠っていました。そこでアラジンは大急ぎでその魔法の粉を探しました。そして「人間を小さくする粉」を見つけると、それをお茶に入れて魔法使いに飲ませるようにジャスミンに言ってから、自分はものかげに隠れました。

p. 29

目を覚ました魔法使いはお茶を飲みました。するとすぐに、体がどんどん縮み始めました。魔法使いの体は、ネズミぐらいの大きさから、針のように小さくなり、そして最後にはひと筋のけむりとなって完全に消えてしまいました。

p. 30

アラジンはランプをこすりました。すると、また魔神があらわれました。

「ご主人様、3つ目の願いごとは何ですか？」

アラジンは答えました。

「うちに帰らせてくれ」

p. 31

またたく間に、アラジンとジャスミンは宮殿に戻っていました。

そしてふたりはいつまでもそこで幸せに暮らしました。

Traditional Tales Stage 7 'Baba Yaga'

p. 2

むかしむかし、ロシアのあるところにナターシャという女の子がいました。

お母さんはナターシャが赤ちゃんのときに死んでしまいましたが、ナターシャはお父さんと2人で幸せに暮らしていました。でもそんな幸せな暮らしも長くは続きませんでした。新しいお母さんがやってきたからです……。

p. 3

ナターシャは優しくて頭のよい女の子でしたが、新しいお母さんはナターシャをととても嫌っていました。お父さんが家にいないときにはいつもナターシャにつらくあたりました。

ある日、お母さんがナターシャにある特別な仕事をいいつけました。

p. 4

「ねえ、ナターシャ……姉さんのところに行って針と糸をかりてこなくちゃならないんだよ」お母さんはそう言ってにやりと笑いました。「おまえ、今すぐ行ってきておくれ。姉さんの家は森の奥深くにあるからね。名前は……バーバ・ヤーガ」

p. 5

ナターシャの気持ちは暗くなりました。お母さんがきつと何かをたくらんでいるのにちがいありません。ナターシャはバーバ・ヤーガという名前を聞いてぞっとしました。バーバ・ヤーガは悪い魔法使いだといううわさを聞いたことがあったからです。

p. 6

ナターシャは行かなくてすむように何度も頼みましたが、お母さんはどうしても許してくれません。

しかたなく、ナターシャは食べものを少しナプキンに包んで勇気をふるい起すと、暗い森に向かいました。

p. 7

「なんだか嫌な予感がするわ……」ナターシャはそう言いながら歩いて行きました。

野原を通過して森に入りました。しばらく歩いて行くと、森の奥深くにやっと1軒の家を見つけました。でもそれはナターシャがこれまでに見たことがないほど不思議な家でした。なんとその家は、大きなニワトリの足の上にたっていたのです！

p. 8

ナターシャが門をあけると、キーツという音がしました。まるで門が「いたいっ！」と叫んでいるようでした。

「まあ、かわいそうに！ずいぶん古くなっちゃったのね」

そう言って、ナターシャは近くに油の缶があるのを見つけて、金具にちょっとさしてやりました。

p. 9

門をあけると、今度はこわい顔をした大きな犬がナターシャに向かってウーツとうなり声をあげました。でもナターシャがナプキンに包んだ食べものを分けてやったり、優しく声をかけてやったりすると、犬はおとなしくなりました。

そこへ、バーバ・ヤーガが姿をあらわしました。

p. 10

バーバ・ヤーガの目は炎のように赤く、歯は鉄でできていました。ナターシャは思わず息をのみました。

「バーバ・ヤーガさん、お願いします」ナターシャは言いました。「お母さんに針と糸をかしてあげてください」

「ほう、そうかね？」バーバ・ヤーガはそう言っ

て、うすい唇をなめました。そうしてナターシャを頭のとっぺんから足の先までじっくりとながめました。

「それじゃあ、中に入ってお待ち。今探してきてあげるから」

p. 12

バーバ・ヤーガが口笛を吹くと、ニワトリの足をした家が自分からやってきました。ナターシャはおそるおそる中に入って見ました。中はうすぐらく、明るいのは部屋のすみにある鉄のかまどだけでした。

p. 13

「ゆっくりしておいで」バーバ・ヤーガはにやりと笑いました。「すぐに戻ってくるからね。今日はもう遅いから夕飯を食べていくかね？」

p. 14

バーバ・ヤーガはそう言って、ナターシャの返事も待たずにスタスタと行ってしまいました。ナターシャが隠れて様子をうかがうと、バーバ・ヤーガは針と糸など全く探そうとせずに、かまどに入れる薪をとりに行って見ました。

そのとき、ナターシャのうしろでだれかが低い声でささやきました。

「あんた、自分が今夜のごちそうになるってわかってるんだろう？なにしろかわいい女の子はバーバ・ヤーガの大好物だからねえ」

p. 16

ナターシャがふり返ると、物かげからやせこけた黒ネコがあらわれました。

「そうね、バーバ・ヤーガはあまりいい人じゃないみたいね」ナターシャは顔をしかめました。「それに、あなたにもあまりごはんをあげてないみたい。ほら、これを食べて。もうこれしか残ってないけど」ネコは驚いて言いました。

「なんて優しい子なんだろう！あんた、私が助けてあげようか……」

p. 18

「さあ、これを持って……死にもの狂いで逃げるんだ」

ネコはそう言って、ナターシャにタオルとくしと小さな石をくれました。

「バーバ・ヤーガが近づいてきたら、これを1つずつ投げるんだよ」

p. 19

ナターシャはネコにお礼を言って、そっと家から出ました。その様子をさっきの犬が見ていましたが、ちっともほえませんでした。門を開け閉めしても、もう何の音もしませんでした。

p. 20

今夜のごちそうが逃げたとわかったバーバ・ヤーガは、カンカンになって怒りました。

「おまえたち、なんで知らせなかったんだ！」そう言って、ネコとイヌと門を責めたてました。

「なにがいけないんです？」ネコが言いました。

「あの子は私たちにとっても親切にしてくれました。それに比べてあなたのひどいことと云ったら！」

p. 21

バーバ・ヤーガはにくにくしげに顔をゆがめると、足をふみならして怒りました。

そしてすぐさまナターシャのあとを追いました。

p. 22

ナターシャは森の小道を必死でかけぬけていました。気がつくと、森じゅうの小さな動物たちがナターシャを追い抜いて行きました。バーバ・ヤーガがもうそこまで来ていたのです。

p. 23

「さっさとあきらめるんだ！」バーバ・ヤーガが叫びました。「逃げられるものか！」

それでもナターシャはあきらめずに走り続けました。バーバ・ヤーガの手が今にも届きそうです…

…

p. 24

そのとき、ナターシャはあのネコが教えてくれたことを思い出しました。そして大急ぎでうしろに向かってタオルを投げつけました。すると、タオルは荒れ狂った川となって、バーバ・ヤーガとナターシャの間に横たわりました。

p. 25

「ちくしょう！」バーバ・ヤーガはこぶしをふるわせて叫びました。

「ふうっ！」とナターシャは息をつきましたが、次の瞬間、バーバ・ヤーガが川の水を一気に飲み込んでしまいました。ナターシャはもう一度走りはじめました。

p. 26

勢いよく森を抜けたナターシャは、野原の向こう側を目指して走りましたが、バーバ・ヤーガはすぐ後ろに迫って来ていました。

そこでナターシャは肩からうしろに向かってくしを投げました。するとくしは森に変わりました。

p. 27

「おのれ！」バーバ・ヤーガは、またこぶしをふるわせて叫びました。

でも今度はナターシャに息つくひまはありませんでした。バーバ・ヤーガがまたたく間に森の小道をかみくだいてしまったのです。

p. 28

バーバ・ヤーガはまだ追いかけてきます。ナター

シャに残されたチャンスはあと1回だけでした。バーバ・ヤーガがまさにナターシャをつかまえようとしたその瞬間、ナターシャは小石を投げつけました。

そしてついにバーバ・ヤーガは倒れました。ナターシャが投げた小石は……なんと山になったのです！

「いい気味だわ！」ナターシャはそう言ってほほ笑みました。こうして、やっと家に帰ることができました。

p. 30

帰ってきたナターシャを見て、お母さんは倒れそうなほど驚きました。ナターシャはこれまでのことを全部お父さんに話しました。もちろんなにもかもお母さんのしわざだったことも……。お父さんはカンカンに怒って、「2度と戻ってくるな」と言ってお母さんを家から追い出しました。

「これでせいせいしたよ！」お父さんがそう言うと、ナターシャもにっこりと笑いました。ナターシャも同じ思いだったからです。

Traditional Tales Stage 7

‘Cinderella’

p. 2

むかしむかし、あるところにシンデレラという娘がいました。シンデレラには優しいお父様がいましたが、お仕事が忙しくてうちにいることはあまりありませんでした。シンデレラには、ママ母とふたりの姉さんがいましたが、3人ともシンデレラのことを嫌いで、いつもいじわるばかりしていました。

シンデレラは一日中、台所で働かされていました。お皿を洗ったり、そうじをしたり、かまどの火を見たり……そんなシンデレラの寝る場所は、灰にまみれた台所でした。

p. 4

ある日、ふたりの姉さんが台所に駆けこんできました。

「ほら見て、シンデレラ！王様からの招待状よ！」いつもは不機嫌な姉さんが大声で叫んでいます。

「お城で舞踏会があるんですって！」いつも怒ってばかりいる姉さんも声を張りあげます。

「ただし、行くのは私たちだけよ」そう言って、姉さんたちはにやにやと笑いました。

p. 5

そして早速、その日着て行くドレスや靴について言い争いを始めました。

姉さんたちは舞踏会の夜になっても、まだ口げんかをしていました。かわいそうに、シンデレラはそんな姉さんたちの着替えを手伝わされていました。

p. 6

姉さんたちが行ってしまうと、シンデレラはさびしくてたまらなくなりました。

「私だって、舞踏会に行きたいわ」

シンデレラがため息をついたとき、うすぐらい台所がパッと明るくなりました。

「もちろん、行かれますとも！」

シンデレラが見上げると、そこにはやさしそうな顔をしたおばあさんが立っていました。

「い、いったいこれは……？あなたはいったいどなたですか？」

p. 7

「私は魔法使いよ。あなたも舞踏会に行けますよ」

「で、でも、どうやって？」

「もちろん、馬車に乗って行くのよ！」おばあさんはそう言ってほほ笑みました。

p. 8

おばあさんはシンデレラに言って、庭のかぼちゃを取ってこさせました。

そのかぼちゃに向かって、おばあさんが魔法のつえをふると……

p. 9

なんと、かぼちゃが金色の馬車になったではありませんか！

「次は馬ね。シンデレラ、このネズミたちをかごから出してちょうだい」

シンデレラが言われた通りにすると、おばあさんはネズミに向かって魔法のつえをふりました。すると……

p. 10

馬車の前にりっぱな白馬が4頭あらわれました！

「さあて」おばあさんはそう言って、近くにいたネコにつえの先を向けました。

「あとは、勇かんな御者だけね！」

p. 11

「さあ、これでもう舞踏会に行けるわ！」

「で、でも……」シンデレラは自分の古びた服に目をやりました。

「この服ではとても……」

「まあ！大変！」おばあさんはそう言って笑いました。

「もう少しで忘れるところだったわ！」

魔法使いのおばあさんはもう一度つえをふりました。すると……

p. 12

シンデレラがこれまで見たこともないような美しいドレスがあらわれました！

「これもはくといいわ」そう言って、おばあさんはシ

シンデレラに1足の靴をさし出しました。
それはガラスでできた美しいくつでした。大きさもシンデレラにぴったりでした。

「さあ、今度こそ大丈夫ね」おばあさんは言いました。
「うんと楽しんでいらっしやい。でもこれだけは忘れないで。12時までには必ず帰ってくるのよ」

p. 14

「時計の鐘が12回鳴り終わると、魔法がとけてしまうの。この馬車も、あなたのドレスも、みんなもとの姿に戻ってしまうのよ」

「わかりました、おばあさん！」シンデレラはそう言って、うれしそうに馬車に乗り込みました。「ほんとうにどうもありがとう！」

p. 15

御者がムチをピシッとしならせると、4頭の白馬が星空をかけぬけて行きました。

p. 16

その頃——お城の入り口の階段では王子様がうんざりした様子で立っていました。いったいいくつかの馬車を出迎え、何人のお姫様にあいさつをしたことでしょう。今またひとつ、馬車がとまりました……

p. 17

中から出てきたのはシンデレラでした。

「あの方はどなたですか？」
シンデレラのあまりの美しさに、王子様は思わずたずねました。
でもだれも答えることができません。だれにもわからないのです。あのふたりの姉さんでさえ……。

p. 18

姉さんたちは近くで見てもシンデレラだとは気がつきませんでした。ただ、ふたりはとても悔しい思いをしていました。
王子様があまりにもシンデレラばかり見ているので、姉さんたちは「なぜ私たちの方をちっとも見てくださらないの？」と騒ぎ立てました。
王子様がシンデレラとばかり踊るのを見て、「なぜ私

たちと踊ってくださらないの？」と叫び声を上げました。王子様はすっかりシンデレラに夢中だったのです。

p. 20

シンデレラはまるで夢を見ているようでした。こんなステキな王子様と自分が踊っているなんて……！

夢中で踊っている間に、シンデレラは魔法使いのおばあさんに言われたことをすっかり忘れていました。12時の鐘が鳴りはじめても、まだ気がつきません。

p. 21

1回目！2回目！3回目！

シンデレラはまだ踊り続けています……

4回目！5回目！6回目！

まだ気づきません……

7回目！8回目！9回目！

この時はじめて、シンデレラはおばあさんとの約束を思い出しました。

大変です！シンデレラには大急ぎで扉めざして駆け出しました。

p. 22

「待って！待ってください！」王子様が叫びました。でもシンデレラは止まるわけにはいきません。

10回目！

やっとのことで扉にたどり着くと、今度は階段を駆けおりました。ガラスの靴が片方ぬげてしまいましたが、シンデレラはかまわず走り続けました。

11回目！

「待ってください、お姫様！！」
シンデレラが必死になってあたりを見回しているときに、王子様が呼ぶ声がこだましました。

12回目！

p. 24

「馬車と白馬はどこに行ってしまったの？」シンデレラはさめざめと泣きました。

そしてしょんぼりと歩き始めました。戻るところはまたあの台所です。

「王子様にはもう2度と会えないのね」シンデレラは

深いため息をつきました。

p. 25

その頃王子様は、何があってもあの美しいお姫様を探し出そうと心に誓っていました。

王子様はシンデレラに恋をしていたのです。

「明日、私は国じゅうの家をまわって、このガラスの靴の持ち主を探します。持ち主を見つけたら、私はその人と結婚します」王子様は宣言しました。

p. 26

翌朝早く、王子様は家来を連れてお城を出発しました。

それから靴の持ち主を探し続け、シンデレラの家に来てきたときにはもう夕方になっていました。

ふたりの姉さんは待ちかまえていました。

「私が先よ！」

「何言ってるの、私よ！」

ふたりは先を争うようにして、靴をはきました。

「残念ですが……」家来が言いました。「こちらの方には横幅が少し足りないようです。こちらの方には長さが少し足りないようで……。ほかにはどなたかいらっしゃいますか？」

p. 28

「私がいいます」その場にそっと入って来ていたシンデレラが答えました。

「はいてみてもいいですか？」

「あんたが？」姉さんたちはさもバカにしたように笑いました。「あんたなんか台所に行ってればいいのよ！」でももう手遅れでした。

p. 29

家来がはかしてみると、靴はシンデレラの足にぴったりと合いました。

王子様は愛おしそうにシンデレラを見つめました。

「私と結婚していただけますか？」

「はい」シンデレラは答えました。

シンデレラにはわかったのです。たとえ古びた服を着ていても、王子様が自分を愛してくれているということ——。

p. 30

王子様はとてもハンサムでしたが、それと同じぐらい心の優しい人でした。

シンデレラはこの上もなく幸せでした。

p. 31

そしてふたりは結婚し、いつまでも仲よく幸せに暮らしました。

Traditional Tales Stage 7 'Rumpelstiltskin'

p. 2

遠い昔、あるところに貧しい粉ひきのお父さんと、リリーという名前の娘が住んでいました。リリーは心のやさしい、かしこい娘でしたが、お父さんはみえっばりでいつもほら話ばかりしていました。

p. 3

リリーは王子様に恋をしていました。でもこんなに貧しい家の娘が、王子様と結婚などできるはずありません。そこでお父さんは王様のところに行って、娘の自慢話を始めました。

「私の娘は麦わらをつむいで、金の糸にすることができのです」

p. 4

王様はとてもよろこんで、早速リリーをお城に呼びつけました。そしてリリーを塔のてっぺんにつれていくと、ひとくくりの麦わらを見せました。

「これをつむいで、明日の朝までに金の糸にするのじゃ。そうすればそなたを息子の嫁にしてやるぞ」王様はそう言って扉に鍵をかけてしまいました。

p. 5

もちろんリリーには、どうしたらよいかなどわかるはずもなく、ただイライラと足をふみならしていました。するとこの音を聞いて、小鬼が姿をあらわしました。「そのネックレスをくれたら、麦わらを金の糸にしてやるよ」小鬼はそう言いました。

p. 6

リリーのネックレスはもともとお母さんのものでしたから、できればだれにもあげたくはありませんでした。でもリリーはどうしても王子様と結婚したかったので、しかたなく小鬼の言うとおりにしました。小鬼はその言葉どおり、とても上手にわらをつむいでいくつもの金の糸車を作りました。

p. 7

王様はよろこんでくれましたが、実はたいへん欲ばりな人でした。

ですから王様はリリーを別の塔のてっぺんに連れて行って、今度はふたくくりの麦わらを見せました。

「これをつむいで、明日の朝までに金の糸にするのじゃ。そうすればそなたを息子の嫁にしてやるぞ」王様はそう言ってまた扉に鍵をかけてしまいました。

p. 8

そこでリリーはまた足をふみならしてみました。すると小鬼があらわれました。

「その指輪をくれたら、麦わらを金の糸にしてやるよ」小鬼は今度もまたそう言いました。

リリーが指輪をあげると、小鬼はわらをつむいでいくつもの金の糸車を作りました。

p. 9

王様はそれを見てたいへんよろこびましたが、もっとたくさん欲しくなっていました。

そこでリリーをまた別の塔につれていき、麦わらのくくりを3つ見せました。

「これをつむいで、明日の朝までに金の糸にするのじゃ。そうすればそなたを息子の嫁にしてやるぞ」王様は今度もまたそう言って、扉に鍵をかけました。

p. 10

そこでリリーがまた足をふみならずと、小鬼があらわれました。

リリーは言いました。

「あなたにあげるものはもう何もないの。でもなんとか助けてもらえないかしら」

小鬼は少し考えてから答えました。

「最初に生まれた子をくれたら、麦わらを金の糸にしてやるよ」

p. 11

リリーは子どもがそれほど好きではなかったので、小鬼の言うとおりにすると約束しました。そうして、小鬼はまたわらをつむいでいくつもの金の糸車を作りました。

王様は今度こそ約束を守って、リリーを王子様と結婚

させてくれました。

p. 12

それから何年かたちました。リリーはとても幸せだったので、子どもが好きではなかったことなどすっかり忘れていました。リリーと王子様との間にはかわいい男の子が生まれていました。名前をトムと言いました。

p. 13

リリーは小鬼との約束も忘れていました。でも小鬼はちゃんと覚えていました。トムのはじめてのお誕生日にやってきて、「子どもをもらっていくぞ」と言いました。

p. 14

トムを手放すことなど、リリーにはとても考えられませんでした。そこで、小鬼に黄金をあげると言いましたが、小鬼は「ほしいのはトムだけだ」と言いました。

p. 15

でも、前にも言ったように、リリーはかしこい娘でした。

「もしも私があなたの名前をあてたら、トムを渡さなくてもいいかしら？」

リリーがそう言うと小鬼は、

「それなら 3 日やろう」と言いました。「だが無理だと思うがね。そのときは子どもをもらっていくぞ」

p. 16

リリーは早速名前探にとりかかりました。最初の日は、リリーが聞いたことのある男の子の名前を全て書き出しました。その夜やってきた小鬼に「あなたの名前はアダムかしら？」と聞いてみると、小鬼は「ちがうね。そんな名前じゃないな」と言って笑いました。

p. 17

「それじゃあアフメドかしら？」リリーが聞くと、「いいや、それもちがう」と言って小鬼は笑いました。

p. 18

リリーはそのあとも、「アキーム」「アントン」「ハッサン」「ハンス」と聞いて行きましたが、どれについても小鬼は、「そんな名前じゃない」と言いました。

p. 19

2 日目はお城の図書館に行って、今度はリリーが聞いたことのない名前を全て書き出しました。その夜小鬼がやってくると、リリーはたずねました。

p. 20

「あなたの名前はアキレス？」

「いいや、ちがうね」小鬼はまた笑いました。

「じゃあ、アクセル？」

「ははは…そんな名前じゃないな」

p. 21

リリーは、「カリーム」「キヤスパー」「サントス」「ソロモン」も試してみましたが、やはり小鬼に「そういう名前じゃない」と言われてしまいました。

p. 22

3 日目、リリーはもう何もいい名前が浮かばなかったので、町へ散歩に出かけました。市場の中をぐるぐると歩きまわって、何か新しい名前がないか耳を傾けました。

p. 23

でもリリーが市場の中で耳にしたのは、「ジェームス」や「ジャック」や「ジョナス」といったこれまでに試したことがあるものばかりでした。

p. 24

「もうだめかもしれない」と、リリーがあきらめかけたときでした。ふと、糸車がずらりとならんだ屋台に目が行きました。ひとりの小人が鼻歌を歌いながら、糸車をきれいに並べています。小人はこんな歌を歌っていました。

おれの名前はジョンじゃない

おれの名前はジムじゃない

おれの名前はルンペルシュティルツキン

リリーはにやりと笑いました。なぜかって、その小人こそ、トムを連れ去ろうとしている小鬼だったからです。

p. 26

その夜、小鬼がやってくると、リリーは何も知らないふりをしてたずねました。

「あなたの名前はガンブートかしら？」

「あははは…そんな名前じゃないね」小鬼は笑いました。

p. 27

「じゃあ、マーマレード？」

「ぜんぜんちがう」小鬼はまた笑いました。

p. 28

リリーは、「スラープ」「スクウェルチ」「マトン」「ティンティン」と試していきましたが、小鬼は「そういう名前じゃない」と言いました。

p. 29

最後にリリーは言いました。

「あなたの名前はルンペルシュティルツキンね？」

p. 30

小鬼は足をふみならして悔しがりました。あんまり強くふみならしたので、足が床をつきやぶってぬけなくなっていました。カ一杯引っぱっても、びくともしませんでした。

リリーは手を貸してやりました。そのかわり、2度とリリーの前に姿をあらわさないと約束させました。

p. 31

怒った小鬼は姿を消してしまいました。

トムは、もちろんリリーや王子様とずっと一緒にお城で暮らしました。聞くところによると、3人は今でもまだそこで仲よく暮らしているそうですよ。